放送大学実験番組

「動物の行動」の視聴ノート

赤　堀　正　宜

番組講師　河合　雅夫
日高　敏隆
朝日　稔

動物の行動について３人の先生が夫々専門の立場から講義され、一口に言って大変興味深いシリーズである。

【１】出演者（Presenter　Instructer　Lecturer）について

このシリーズを興味深く魅力的なものに仕立てたものは、出演者の選定がよかったことを第一に挙げなければならない。主任講師の河合先生の巧みな話術、日高先生の素朴な親しみ易い人柄、朝日先生の学者らしい論理的な話し方、この３人の講師の３人三様の話し方がシリーズ全体に変化をもたせ、バランスのよいリズム感によって視る人を惹きつけたのではなかろうか。

教育番組で最も大切な要素は、①Presenter（出演者・インストラクター）②Presentation（提示・演出方法）③Perfection（正確さ・内容の完全さ）であると言われる。この中で最も重要な要素は、①のPresenterである。warm－heart（温み）を感じさせる人、説得力のある人柄の講師が最も望ましい。高度な内容の大学の講義も、巧みな話術と誠実な話し方、リズム感のある表現形成によって、判り易くもなる。従って番組制作者の最も腐心するものは、出演者の選定である。３人の講師の平均年齢は５３歳、油の乗り切

った年齢である。若くて内容に不安を感じさせない年齢でもある。つまり大学講座においては、画面に登場する講師はそのパーソナリティーが拡大されて伝達される。年齢もそうした意味では注意しなければならない。これは単に実際上の年齢を意味するものではなく、精神年齢や肉体的な若々しさを表わす相対的な年齢をも加味しなければならない。こうした条件から考えて、この番組を担当された３人の先生は適任であったと言えよう。

３人で担当された利点は、日高先生が原生動物を、河合先生が高等動物を、そして朝日先生がその中間の動物といった夫々得意の分野を担当されたことである。ここで注意しなければならないことは、３人で担当する場合にシリーズの一貫性をどう持たせるか、全体の講義の責任を誰が負うかを明確にしておく必要がある。「動物の行動」の場合には、主任講師の河合先生の下に明確な役割分担が定まっているので安心して見ることができた。

以上の事から、今後の研究課題として、１つのシリーズが１人の講師で担当されるのが好しいか、又は複数の講師によって分担される方がよいのか、そのプラスとマイナスの研究が必要と思われる。

【２】内容及び演出上の配慮について

①テーマの選定：「動物の行動」について

私達はあまり知識を持ち合わせていない。しかし誰でもが少年少女の頃より興味を持っている領域である。動物の飼育に夢中になった記憶を持つとか、現在ペットとして動物を飼っている人も居るであろう。そういう意味で、シリーズの持つ魅力、期待度の高さから言って学習意欲を起こさせるに十分な番組群である。番組制作者の立場から言えば、視聴者に番組を見る前から興味と関心を持たせ、期待感を抱かせることができれば、８割方成功だと言わ

れる。実験番組として、このシリーズが提案された段階で既に 50 %以上の成功を収めたことになる。

一般に放送大学の提案番組は題名が固い、なじみにくい。講義の内容そのものが、固くて論理的だからと言ってしまえばそれまでである。大衆に開かれた（Open ）大学としては、もう少しネーミング・タイトリングに考慮を払ってもよいのではないかと思う。本の題名をそのまま番組のタイトルにすべきではない。このシリーズは、放送大学の番組提案において、如何に魅力的なテーマで提案をしなければならないかを私達に示唆してくれる。

次に素材の提示方法について二，三気付いた点を述べてみよう。

②素材提示について

素材の提示方法として３通りの方法を取っている。a ，実際の動物の行動を顕微鏡による特殊撮影を用いて表現したり、イルカの行動を水中カメラで撮影、更に類人猿の行動をドキュメント（記録）によって示している。b ，一方、こうした行動を次に模型を使い行動モデルを詳しく説明し、c ，最後に図形（パターン）を使って、行動を抽象化し図式化して説明している。つまり、実際の行動→モデル→図式、という３段階のPresentation を採っている。この手法は教育番組において最も優れた方法である。E・デールの言う様に経験ー事実ーを土台に抽象へと結びつけることは教育の常道である。こうした意味でこの番組は素材提示の一つのモデルを私達に示している。

更に言えば、素材提示の望しい方法は、繰り返し（Repetition ）と螺旋的上昇（Spiral ーup）提示である。この番組ではそうした方法もとられている。

③実験的方法の提示

教育番組ばかりではなく一般対象向け番組においても実験が用いられるようになった。この実験は科学番組だけでなく、社会・経済問題を扱う番組でも見られる。しかし科学番組においては、とり分け偉力を発揮する。動物の行動シリーズでは、食餌行動・性行動・コミュニケーション行動・育児行動等に於いて珍しい実験の様々を見せてくれる。実験は、行動の動機づけや欲求を明確にティピカルに示してくれるとともに、私達に学習方法論・研究方法論を教えてくれることにもなる。また番組の信頼度を高める上でも重要な役割を果たしている。

実験の為の工夫・条件のコントロール、それによる動物の行動の違いから、仮説の検証を進める手順は、言うまでもなく科学の方法である。３人の先生は教訓的な事を一言も言っては居ないが、視聴者（学習者）はそれを学ばなければならない。

④アシスタントの登用

この番組では、アシスタントとして女性の大学院生が出演している。アシスタントの役割としては、ａ，番組のペースメーカーとしての役割、ｂ，視聴者の代表、ｃ，講義の一部を分担する講師のサブ的役割等が考えられる。ペースメーカーとしては、講師の話しを引出す引出し役である。この番組のアシスタント“皆川美恵子さん”は、ｂのタイプで学生の代表として講師に質問をする役割を担っている。先にも述べたように、３先生共に優れた話術を持ちテレビ出演にも慣れて居られるようなので、あえてアシスタントを使わなくてもよかったのではないかと思う。アシスタントの使い方はなかなかむずかしいものである。幼児・小学校番組においては、先生と児童生徒を結ぶ橋渡しの役目を持ったものが多い。お兄さん・お姉さん役がこれである。

大学教育番組において必要かどうかは、もう少し検討してみる必要がありそうである。

【3】テキストとの関係について

最後にテキストと番組との関係について感想を述べておく。この番組のテキストは各回が読み物としてもよく書かれていて飽きない。また理解しやすいように表や図・写真等が適宜配置されていて編集が行き届いている。

番組との関係では、番組がテキストを映像化したものと思えばよく、従って番組を見なくてもテキストを読めばある程度の事は理解できるようになっている。番組とテキストの一致度が高いのである。またテキストそのものが読んでイメージが浮かんで来るようによく書かれているのである。

テキストのあり方については様々な考え方がある。教科によっても違いがある。例えば語学や文学では、課題を中心とした編集になる。数学や物理・科学等でもそうした傾向がある。一方、経済・社会関係では資料的な要素と解説的な要素を併せ持つものが多い。また思想の科学では、ほとんどが解説で尽くされてしまう。この様に教科・領域によって随分差があるのである。さらに、書く人の考えによってタイプが違って来る。しかしテレビのテキストはあくまで相互補完的なものでなければならず、文字メディアと映像・音声メディアの特色を夫々生かして作られて居なくてはならない。そういう意味で、「動物の行動」の場合にはどちらかと言うと「テキストの映像化」とも言える関係なので、もう少し違った分野を埋め合わせた方がよかったのではないかと思う。例えば、テキストの扱う部分は幅広いものがあってもよいし、事実、実態の説明から総合的な普遍性へと論理の展開があった方がよいと思う。ちょっと事実の記述にウエイトがかかり過ぎているような気がする。

しかし興味のある人にとって探究の手がかりとなる参考文献がたっぷり掲載されているのは嬉しい限りである。

【４】その他の問題

a テーマの選定について

原生動物の行動から始まって鳥の行動　そして霊長類の行動へと生物進化の課程に沿ってテーマを配列したことはよく理解できる。しかし、15本を通しての一貫したテーマがやや不明確である。テキストの前説にも述べているように「動物は現在 100万種以上が知られて居り、総ての動物に共通な行動法則を抽出することは困難である。」テーマを一見すると、現在実験によって発見されたティピカルな行動様式をピックアップして並べた観がある。テーマ配列として領域別の配列方法もあろう。例えば、①社会行動　②性行動　③育児行動　④コミュニケーション行動　⑤食餌行動　等の分類である。こうしたテーマで横断的な構成方法で番組を制作してみてもよいと思われる。これは次のシリーズに期待してもよいであろう。

b テーマ編成のあり方

言うまでもなく大学に於けるカリキュラム編成は、教官の自由にまかされている。年間テーマの編成も同じである。そこで教養課程においては、できるだけ学問の成果として教官が共通に認め得る内容のものが放送されるように考慮すべきである。そういう意味で、３人の講師による合議制によって、15本のシリーズが編成されたことはよい方法であった。この実験番組群では、単一講師によるもの・複数講師によるもの・単一講師の不得意の部分を補うために、ゲスト講師が出演する番組等様々なものがある。要は基本科目にお

いてはあまりユニークな論理の放送は望しくないので、それに歯止めをかける手段を講じておけばよいのである。

専門科目においては対照的にユニークさが求められなければならない。○○教授論が展開されることが望しい。編成上そうした要求が明確に出演講師になされなければならない。そうしなければ、どの番組を取っても同質で面白味の無い空虚なものになってしまう。

c 将来の研究に対する展望について

実験番組に仮説はあるのか。

実験番組と言うからには、研究テーマに従って番組制作と放送が出されなければいけない。7つのシリーズで、夫々が研究テーマ（仮説）に沿って制作されているのであろうか。そうではない。一般教育番組と何等形式も内容も異なることは無い。例えば、在宅学習番組として、単一講師による放送がよいのか、複数講師による放送がよいのかの比較研究をするとか、課題解説的な内容のもの（テキストに、あらかじめある動物の行動についての研究課題を与えておいてその解説をする。この場合、視聴者が簡単な実験をしておかないと番組を見ても無駄になる。）等様々放送によって在宅学習を促進するための研究課題はいくらでも見つかるはずである。こうした課題を解明するための番組が、「実験番組」として期待されているし、そうした要求が研究者から番組制作者へどしどし出て来なければならないのである。